

室君

ワキ 明神の神職

狂言 神職の下人

ツレ 室君

シテ（謡なし） 明神の神霊

地は 播磨

季は 春

ワキ詞

「是は播州室の明神に仕へ申す神職の者にて候。さても天下泰平の折節なれば。室君たちを船に載せ。囃物をして神前にまゐる御神事の候。いま此時もめでたき御代なれば。急ぎ御神事を執りおこなはゞやと存じ候。いかに誰かある。

狂言

「御前に候。

ワキ詞

「いそぎ室君たちに神前へ御参りあれと申し候へ。

狂言

「畏つて候。

ツレ

「室の海。

地

「室の海。波ものどけき春の夜の。月の御舟に棹さして。霞む空は面白やな。霞む空は面白や。

ツレ

「梅が香の。

地

「梅が香の。磯山遠く匂ふ夜は。出船も心ひく。花ぞ綱手なりける。此花ぞ綱手なりける。

ワキ詞

「近頃めでたき御事にて候。又ことごとく棹を御さし候ふほどに。棹の歌を御うたひ候へ。

ツレ
「棹の歌。うたふ浮世の一節を。」

地
「うたふ浮世の一節を。夕波千鳥こゑそへて。友よ
びかはす海士乙女。恨みぞまさる室君の。行く船
や慕ふらん。朝妻船とやらんは。それは近江の海
なれや。我も尋ね尋ねて。恋しき人に近江の。海
山も隔たるや。あぢきなや浮舟の。棹の歌をうた
はん。水馴棹の歌うたはん。」

クセ
「裁ち縫はぬ。衣着し人もなき物を。何山姫の布さ

らすらん。佐保の山風のどかにて。日影も匂ふ天
地の。開けしもさしおろす。棹のしたぐりなると
かや。」

ツレ
「然れば春すぎ夏たけて。」

地
「秋すでに暮れ行くや。時雨の雲のかさなりて。峰
白妙に降りつもる。越路の雪の深さをも。知るや
しるしの棹たてゝ。豊年月の行末を。はかるも棹
の歌。歌ひていざや遊ばん。」

ワキ詞

「いかに申し候。かゝるめでたき折節に。そと御神
樂を参らせられ候へ。」

ツレ詞

「さらば御神樂を参らせうずるにて候。こゝとても。
室山かげの神垣の。」

地

「加茂の宮居はありがたや。」
(神樂)

ツレ

「月影の。」

地

「月かげの。更けゆくまゝに風をさまれば。不思議
や異香薫じつゝ。和光の垂迹。韋提希夫人の。姿

をあらはしおはします。
(中の舞)

地

「玉のかんざし羅綾のたもと。く。風にたなびく
瑞雲に乗り。所は室の海なれや。山はのぼりて。
上求菩提の機をすすめ。海は下りて。下化衆生の
相をあらはし。五濁の水は。実相無漏の大海とな
つて。花ふり異香くんじつゝ。相好まことに肝に
めいじ。感涙袖をうるほせば。はや明けゆくや春
の夜の。はや明方の雲にのりて。虚空にあがらせ

給ひけり。

底本…国立国会図書館デジタルコレクション『謡曲評釈 第四輯』大和田建樹 著